

作者像を思いうかべながら物語文を読む

－第6学年「宮沢賢治童話世界への旅」の実践を通して－

谷 栄 次

1. はじめに

「教育課程審議会」の「答申」による国語科の「改善の基本方針」の中に、「特に、文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導のあり方を改める」ことが出され、様々な論議がされてきた。この問題は、単なる詳細な読解という指導法の問題として捉えるのではなく、教材と学習者、そして教材化を図る教師の三者の関係の中で捉えていく必要がある。文学的な文章の詳細な読解の根底に、「教材をどう教えるのか」という考え方が見え隠れする。優れた文学作品であればあるほど、そうした考え方が強くなる。「まず教材ありき」この考え方に偏っていることがこの問題の本質ではないだろうか。この教材を通して、どんな「ことばの力」を伸ばすのかを常に意識し、そのための教材研究（この場合、文学作品のもつ特性を把握し、どの内容をどういう方法で子どもたちにふれさせるかという意味で使う）こそが、今、求められている。国語科の役割が、「ことばの力」をねらいとするなら、読みをより深いものにするために、叙述の細部に目を向けた読解も当然必要となる。どんな指導法にしても、そこに子どもたちの生き生きとした表情で学ぶ姿がなければ形骸化したものになってしまう、そのことが問題なのである。

本校の国語科は、課題解決的な学習を中心に研究を積み重ねてきた。文学の授業の場合、全文通読に始まり、初発の感想から学習課題を設定し、課題を話し合いにより解決し、ふりかえりをするという学習の流れを基本としている。文学の読み方・楽しみ方も含めた総合的な「ことばの力」を生かす場が次の文学教材までお預けになることを克服するために、単元構成を工夫しなければならなかった。本稿では、宮沢賢治の童話を教材として、子どもたちが獲得した読みの方法が生かすことができる単元構成の工夫に焦点を当て考察していく。

2. 単元「宮沢賢治童話世界への旅」について

(1) 単元を設定するにあたって

① 研究テーマと関わって

研究テーマ「自立に向かう子どもたち」の切り口として「自分で決める場を大切に」をサブテーマとして掲げている。本単元では、「やまなし」を共通教材とし、読み深める視点や学習の方法を学び、さらに他の作品を読む場を設定し、学習の成果を交流し合う読書会を開くことで、「学びを生かす」単元構成とした。賢治の作品を自ら選び、自らの力で読み進め（自分の力で学ぶ）、その成果を交流することでさらに広げたり深めたりする（学び合い）活動を通して、本校のめざす子ども像に迫っていききたい。

② 賢治の童話の特性を活かして

文学を読む楽しさは、単にあらすじや登場人物の心情を読み取るということだけではない。叙述にそって読み取ったことを自分のことばで書いたり話したりして表現することを通して、文学の世界を味わうことができる。そうした活動を繰り返すことによって、子どもたちは確かに豊かな読み

を自分のものにしていくのである。

宮沢賢治の童話は、難解であるとよく言われる。それは賢治の表現技法（擬態・擬音・比喩・色彩・造語など）が随所に使われ、賢治独特の世界観がそこに繰り広げられるからであろう。しかし、考え方を換えれば、賢治の童話には、自然や人間に対する考え方や見方、生き方そのものがしっかり反映されているとも言える。

③ 単元構成の工夫と具体的な活動計画

①と②を踏まえて、単元構成の特徴は次の2点としてまとめられる。

単元構成の工夫1

作者である賢治に対する自分のイメージをまとめる活動を導入として位置づける。

単元構成の工夫2

読みの視点や学習方法を身につける全体の学習（「やまなし」と学んだことを試し生かす個別の学習（自分の選んだ童話）、さらにその成果を交流し合う全体の学習（読書会）の3つの柱で単元を構成する。

(2) 単元のねらいと指導計画

単元 宮沢賢治童話世界への旅

●ねらい

- 読む力 ・賢治の独特の言葉の使い方とそこから生まれるイメージを楽しみながら読むことができる。
- 聞く力 ・読み取ったことをもとにしなが、賢治の考え方や感じ方を話し合うこと話す力 とができる。
- 書く力 ・主題に対する考えや感想を入れた作品紹介を書くことができる。

●学習の流れ

- | | | |
|-----------|--|-----|
| オリエンテーション | 「宮沢賢治」っていったい？ | 4時間 |
| | ・賢治に対する自分のイメージを短い言葉でまとめる。 | |
| | ・賢治の作品「狼森と筑森、盗森」を読む。 | |
| 第一次 | 「やまなし」を読もう | 6時間 |
| | ・かにかの様子に着目し、「二枚の幻灯」についてのイメージの違いを読み取る。 | |
| | ・賢治の独特の表現の工夫（造語・色彩・擬音・擬態・比喩）について考える。 | |
| | ・「二枚の幻灯」から賢治の作品に対する思いをまとめる。 | |
| 第二次 | 賢治の作品を読もう | 6時間 |
| | 「雪渡り」「月夜のでんしんばしら」「どんぐりと山猫」「よだかの星」
「セロひきのゴージュ」「注文の多い料理店」 | |
| | ・読んだ賢治の作品について紹介の仕方を工夫し、読書会を開く。 | |
| | ・作品を比べ、賢治の考え方や感じ方についてさらに話し合う。 | |
| 第三次 | 賢治へ・・・ | 1時間 |
| | ・これまでの学習を振り返り、賢治に対する自分の思いをまとめる。 | |

3. 実際の授業展開

(1) オリエンテーション「宮沢賢治はどんな人か？」

宮沢賢治という人をほとんどが知っているが、どんなことを知っているかについては、童話の題名ばかりで人柄に迫るものはなかった。そこで、賢治について簡単にまとめたものと「注文の多い料理店」の序を資料とし、賢治はどんな人かを自分の言葉で表現する活動を行った。子どもたちから出されたものは次のようなものであった。

- ・心豊かな人 ・心優しい人 ・夢のある人
- ・みんなのためなら ・みんなの幸せは自分の幸せ
- ・みんなを心から愛せる人 ・感情豊か
- ・自分よりみんな ・生き物と自分は兄弟
- ・自然と友達 ・自然が好きな人 ・動物の見本
- ・自然と心から関わられる人 ・自然と話せる人
- ・自分以上に生き物を大切にしている人 ・執着
- ・一つ一つのことに熱心な人 ・置き換える人
- ・今を越える ・宇宙からの使者 ・特異な人物

「自然」「みんな」「優しい」「豊か」「変わり者」

こんな言葉でまとめられた賢治像。「狼森と策森、盗森」を読む活動を取り入れた。3つの不思議な出来事を通して、自然と村人との共存が描かれ、作品を読むことで子どもたちの抱いた賢治像が確かめられると考えたからである。3時間で、森の描かれ方とその森たちと村人との交流について読み取り、自分の賢治像と照らし合わせた。

(2) 第一次「やまなし」の学習

① 「やまなし」を読んだ初発の感想から

「やまなし」を読んで、賢治像にふれた感想を書く子どもたちもいた。

- やっぱり賢治は自然が好きなんだと思った。
- 賢治は、人間と動植物をいっしょにして物語を作っているのすごい。
- 賢治の想像力のすばらしさがわかった。(想像することが好きな人ではないか。)
- 賢治はやさしい自然のめぐりを描きたかったのでは？かわいいやさしいきれいな自然が将来めっちゃめっちゃになるのを知っていて書いたと思う。
- 川底から見たことを現実的に描いているのが賢治らしい。
- これまでの私の知っている作品は、森や草、そしてけものとヒトだったのに、川の中だったことでイメージがくつつがえされた。

このような感想が出るのは、自分の賢治像と作品を照らし合わせているからであろう。そうした意味において、第一次での学習が「やまなし」の学習に有効に働いたものと考えられる。

宮沢賢治とは誰か

宮沢賢治は、日本で世代をこえてもっともよく読まれ、愛されている作家のひとりである。約100年前の1896年に岩手県で生まれ、37歳の若さでなくなった。そのため、生前に出版されたのは、童話集「注文の多い料理店」と詩集「春と修羅」だけで、ほとんど世に知られていなかった。しかし、彼の死後、書き残した多数の童話と詩などが編集され出版されるとともに、作品世界の豊さと深さが広く認められるようになった。

1996年(今から3年前)は、賢治の生誕100年にあたり、故郷の岩手県をはじめ、全国各地でさまざまな催しが開かれただけでなく、賢治をめぐる多数の書籍が出版され、たくさんのテレビ番組と何本かの映画が製作され・・・といったようにさまざまなメディアをあけての大きなブームとなった。

賢治の生まれた家は、裕福な豪邸であり、周囲の貧しい人々からしばりといった利益によって、恵まれた生活をしてきたのではないかという思いに苦しめられてきた。そうした思いと仏教への信仰から、賢治は短い生涯の間、貧しい農村の生活を少しでもよくした、役立ちたいという情熱を持ち続けた。また、賢治は科学や哲学、芸術に対しても強い関心を持ち、知識を吸収していった。

賢治の物語では、人と動物や植物、風や雲や光、星や大洋が語り合ったり、交感(心と心の結びつき)し合ったりする「関わり」に大きな特色がある。また地質学者の訓練を受けた賢治は、野外を歩き回って観察しながら自分の心の中からわいてくるさまざまな感情や考え、思うことを記録するという方法をとった。そうした方法を「心象スケッチ」と呼んだ。

賢治は生き物はみな兄弟であり、生き物全体の幸せを求めなければ、個人の本当の幸せもありえないと考えていた。単にそう考えただけでなく、山野を歩き、生き物や動物、風、雲、虹、星などと関わるうちに、しばしば自分を忘れて没入する人だった。それが賢治の文章の豊かな活力のもとになったことは言うまでもない。

「注文の多い料理店」の「序」から

(前略)

これらのわたしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらったのです。

ほんとうに、かしわばやしのおおひ夕がたをひとり通りかかったり、11月の山の風の中に、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかなないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようではしかなないということをわたしはそのとおり書いています。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまたよくわからないのです。(後略)

② 賢治独特の表現の工夫について

「やまなし」の学習は、声に出して読むことを中心に授業を進めた。賢治の作品の語感を体で感じ取らせたかったからである。その後、五月の幻灯と十二月の幻灯を自分の言葉でまとめ、それぞれのイメージを対比させる話し合いをした。それぞれの場面において、表現の工夫について子どもたちが書いたものを取り上げ、教科書の叙述から見つけ出すという活動も取り入れていった。

子どもたちから出された「やまなし」に見られる表現の工夫

- 表現方法が特別で他の文章にはない。(少し変わった表現方法をしている。)
- 情景の表し方がとてもきれいでいいと思った。
- 二枚の幻灯から話ができてるのはすごい。
- 詩のようなどころがある。(「クラムボンは、わらったよ・・・」)
- 比喩表現(たとえ)を使っている。
- 音を通じての文章がある。
- クラムボンとかイサドなど賢治にしか書けない言葉がある。
- 「天井」という言葉からかにかになりきって物語が読める。

(3) 第二次 自分の選んだ賢治の作品を読もう

「宮沢賢治は、どんな人か?」「やまなし」の学習で学んだことは、①賢治に対するイメージをもつこと(賢治のものの見方や考え方)、②「やまなし」における賢治独特の表現方法(情景描写の美しさ)、③「やまなし」の文章構成の工夫(五月と十二月の幻灯の対比)、④かにかの気持ちを想像しながら読む、の4点である。

話の特性を考えて、「雪渡り」「月夜のでんしんばしら」(リズムカルな表現と情景描写の美しさ)「セロひきのゴージュ」(人間と動物の心の交流)「よだかの星」(みんなのためにという賢治の考え方)「どんぐりと山猫」「注文の多い料理店」(文章構成の工夫が似ているもの)の中から選ぶようにした。子どもたちが選びやすいように簡単な紹介文も準備した。まず個人で童話案内を書き、それをもとに同じ作品を読んだグループで話し合いをした。グループの代表がパネラーとなって、全体での読書会を開いた。

<p>月夜のでんしんばしら 主人公恭一の心情</p>	<p>文から読みとれる 主人公恭一の心情</p>	<p>賢治の語録と創造語録</p>	<p>二本うで木の工兵衛 六本うで木の意匠</p>	<p>二とぼ語録 賢治の言葉は日本語を やわらしているがそれは賢治 の世界が広く大きいゆえに 成っていると思う。(感雑)</p>
<p>自然と人工のギョウフ</p>	<p>宮沢賢治の描く自然 賢治賢治の描く自然</p>	<p>賢治の世界に解れた 賢治は何かをうたえて止る</p>	<p>賢治の世界に解れた 賢治は何かをうたえて止る</p>	<p>賢治は生き、笑っている 賢治は生き、笑っている</p>

あらすじ、登場人物関係図、文章構成の工夫、主題、これまでの作品と比べて思ったことなど、童話案内は、感心させられるものが多かった。しかし、個人の読みがグループの話し合いでは、報告になってしまい、練り上げられにくい面があった。全体での読書会でも童話の比較から、自分の賢治像がより明確になり確認はできたものの、新たな発見という点では、もの足りなさを感じた。

4. 成果と課題

学習のまとめとして賢治へ自分の思いを伝えることで学習のまとめとした。その中から抜粋したものである。

読む活動を通して、賢治像から童話へ迫る、童話の読みから賢治に迫る、このくり返しがなされていた。読み深める段階において、賢治像を思い浮かべることは、より深い読みをするための手助けになる。つまり、賢治の世界と作品の世界を重ね合わせて読む活動が子どもなりにできていたと考える。このことは、単元構成の工夫1の成果と言える。

ふだんの読書活動では、本と個人との間で読むという活動が成り立っている。読書活動につなげる点でも、学習する内容を明確にし精選した後に、作品まるごとぶつかり合う場を保障した単元の構成はよかったと考える。

個の学びの成果をさらに練り上げていくための方策については、子どもの実態を見すえて、話し合いの焦点化をどこで図るのかをしっかりと吟味していく必要がある。また、読書会に取り上げた作品全てを全員の子どもたちがどれだけ読んでいるのか曖昧な部分があった。話し合いを活発にするためにも、読書活動とつなげて作品をじっくり読み、童話案内と比べながら自分の思いをふくらませる時間を取るべきだったと考える。

5. おわりに

「ごんぎつね」を読んで涙する子どもがいる。教室の場でそこまで子どもたちが物語と向き合うことができるだろうか。子どもたちは向き合いたいと思っているのに、教師の気の利かせた発問により引き戻される。そんな授業はしたくないと思いこの実践を行った。

物語のもつ虚構の世界を真から味わうためには、読み方・楽しみ方も知った上で、さらに個の読みに任された自由さも必要になるのではないだろうか。そのためにどういった単元構成の工夫をすればよいのか、これからも研究を進めていきたい。

- 自分だけの世界・・・。賢治の本にはそれがある。独創的なのだ。賢治の本は、正しく読めないというより正しい読み取り方はない。ふだん読んでいる本は、一度読んでストーリーがわかったら楽しくなる。賢治の本は、一読目は理解不能、二読目意味理解、三読目には、二読目と違った理解ができる。賢治の罨にはまるのだ。一略
- 賢治の理想の世界。それは、人と動物と自然が仲よく共存する世界です。そんな賢治の思い、理想、夢などを作品にたくし、その作品の中で現実化させるのです。賢治の作品は深くむずかしいとよく言われますが、それはきっと書いているときに書ききれないくらいの思いがあったからだと感じました。一略
- 賢治は、自然と一体となって、ものを見ることができ、またそれを子どもの視点から文章にしていける人だと思う。だから一つ一つの言葉が新鮮で生きていると思う。一略
- 文章を読んでいると、いじわるな賢治、やさしい賢治、こわい賢治、むずかしい賢治などいろいろ出てきた。あまりにたくさんの表現方法がところせましとならべてあり、賢治はそれをうまく人形のようにあやつっている。あまりに上手にあやつっているのどこが中心なのかわからなくなってくる。賢治はそれが望みだったのかもしれない。読者を文章にさそいこみ、あやつるのが。一略
- いくつかの童話を読んでいくと、自然に対する思いが私にも読めてきました。賢治にとって自然は庭のように感じられて、その中で出来事を書いているような気がしました。一略
- 最初「狼森と笹森、盗森」を読んだとき、(こんなの知るか)という感じだった。授業の中では(なるほどなあ)。「やまなし」ならと思ったが、やはり一読ではわからない(疑問だらけ)。授業で意見を聞いていると(わたしなら)と思うようになった。いよいよ「よだかの星」(賢治はこんなことが言いたいのか、感動した)と勝手に考えている自分がいて、(えっ、私、そこまで考えていたのか)になりました。